

# 令和に憶う旅

## 「知」「情」「意」の精神活動をフル稼働

高志の国文学館館長 中西進氏

「JATA経営」フォーラム

2020」の特別講演では、元号「令和」の考案者としても知られる「高志の国文学館」館長を務める国文学者の中西進氏が、令和時代における旅について、持論を熱く語りました。

### 旅の根幹は「未知」への欲求

旅というものは、人間が生まれ落ちた時から背負っている「私」というものの半分の世界であるという気がします。その旅を具体的に考えると、昔から「知」と「情」と「意」という三つのテーマがあったように思います。

まず、最初に「『未知』への探求」というテーマです。

私たちは「未知」なるものへの飽くなき欲求を持っていると思います。そして、このことこそが、旅というものの大きな根幹ではない

かと考えます。

令和時代がのちにどういう時代だったと括られるか考えると、退嬰的な時代というようになるのではないかと気がします。

『「未知」への探求』は、退嬰的な時代にあつて自分が逆の生き方をするチャンスが残されていることでもあり、それが旅の持つ二つの意味合いとなるのではないのでしょうか。

### 「草枕」「手枕」を入れ子型で

二番目のテーマは、『「非日常」の開発』です。

民俗学では、「日常性」を意味する「ケ」という言葉に対して、「非日常性」を表す「ハレ」という言葉があります。

「ケ」と「ハレ」という対照の中から、農民たちの民俗を探ろうと



特別講演で登壇した「高志の国文学館」の中西進館長  
[なかにし・すすむ/アジア文化と『万葉集』の比較研究で知られ、2004年文化功労者、2013年文化勲章受章。著書に『中西進万葉論集』(全8巻)、『中西進著作集』(全36巻)など]

するわけですが、私は、「ケ」と「ハレ」を違った別物ではなく、入れ子型の考え方を提唱したいと思っています。

「草枕」が旅なら、「手枕」が家ですが、発想としては、「手枕」という日常にいなながら「草枕」という旅経験もできるのではないかといいことです。万葉集の中に「真旅」という言葉があります。「本当の旅」という意味ですが、本当の旅があるなら、偽りの旅もあるはずです。要するに「実感」を重んじて区別をしておき、「草枕」と「手枕」を入れ子型で考えると、新しい旅経験をできるのではないかと思います。

### 旅経験は永遠性の円環で

三番目は、『「廻ること」の確認』です。

旅は「たぶ」という言葉から来ています。万葉集では「けむり」も「けぶり」も出てきますが、「たぶ」も「たむ」と同じです。「たむ」というのは、田んぼを回るという意味ですから、旅も「廻る」ということになります。

「廻る」という円環には、永遠性があります。旅経験は円環でなければならず、旅に出たら還ってきて、また、旅に出なければなりません。

還るといえるのは、原点に戻るといことです。人間の活動の中でも非常に大事なものであり、強い意志を持って行うものでもあります。

最初の「知」、二番目の「情」、最後の「意」という精神活動をフル稼働して、還ってくるのが旅ということなんです。

自分を広げ、自ら変化して、最後は還る。この三つが、私が令和に憶う旅であります。